

令和8年度羽島市教育委員会点検評価委員会 会議要旨

日 時	令和8年7月29日（水） 13時25分～14時50分
場 所	羽島市役所本庁舎 4階 406会議室
出席者	【委 員】 棚野委員長、坂井副委員長、那須委員、杉山委員、小林委員 【事務局】 森教育長、不破事務局長、中島教育政策課長、長江学校教育課長、竹内北部学校給食センター所長、亀山南部学校給食センター所長、近藤学校教育課課長補佐、水谷教育支援センター所長補佐、高木教育政策課課長補佐、山田同課課長補佐、服部同課政策係長、豊島同課専門員 【傍 聴】 1名
内 容	1 委嘱書交付 2 開会 【教育長】 ・昨日の熊本地震での甚大な被害や被災された方々に思いを馳せると、心が痛む。こうした災害が起きると危機管理やリスク管理に目が行く。子どもたちの命を預かる身として、いつ何時こうした大災害が降りかかってくるとも限らないと感じている。被害を最小限に抑えるための施策はもちろんのこと、日頃からの心構えが必要であると痛感している。 ・教育の役割は年々、大きくなっていると感じている。最近よく口にする言葉として、子どもたちや先生方の「ウェルビーイング」がある。さらに、多様性を理解して支援していくことや、デジタル社会に生きる子どもたちに必要な力をつけていくことも重要である。 ・学校の再編等の様々な課題はあるが、学校は依然として地域の核となる大切な施設であり、地域とのつながりをどのように強くしていくかを考えていく必要がある。 ・教員不足や採用倍率の低下という課題がある中で、働き方改革を進めながら教師の魅力を発信していくことも、私たち教育委員会の重要な使命であると考えている。 ・最後に、本委員会とは直接関係ないが、現在、10年後・20年後の羽島市の学校のあり方を見据えた「学校構想」に向けて、この5月から6月にかけて、子どもや保護者（小中学生および未就学児）、一般市民を対象にアンケートを実施した。結果の詳細は割愛するが、回答者が子どもの育成や学校教育の未来について非常に深く考えていることが伝わるものであった。また、地域ごとに結果が異なる点も特徴的である。このアンケートを通じて改めて痛感したことは、「未来について考えるための情報（少子化や施設の現状、これからの教育の方向性等）を丁寧に提供すること」の大切さである。 3 委員紹介

4 委員長・副委員長選出（棚野委員長、坂井副委員長を互選）

【委員長】

- ・昨日、熊本で大きな地震が発生した。私自身、阪神淡路大震災を神戸で経験している。被災地への支援とともに、避難所となった学校が日常を取り戻すまでに大変な苦労があったことを思い出し、今回の熊本の状況を深く案じている。

- ・世の中の急激な変化を表す言葉として、以前は「VUCA（ブーカ）」が使われていたが、最近はさらに一歩進んだ「ラプト（RUPT）」という言葉がある。

学校現場に当てはめると、AI等の急速な変化（R）、AIの進化により様々なコンクールが成り立ちづらくなり、子どもたちが将来就く仕事も予測困難（U）、教員の働き方改革と子どもの手厚い支援の両立等の矛盾（P）、不登校の要因のような複雑なもつれ（T）といった要素があり、今回の点検評価表にすべて含まれている。我々（委員）も子どもたちのために少しでも力になればと考えている。

※VUCA：変動（Volatility）、不確実（Uncertainty）、複雑（Complexity）、曖昧（Ambiguity）

※RUPT：急速（Rapid）、予測困難（Unpredictable）、矛盾（Paradoxical）、もつれ（Tangled）

5 議事

羽島市教育委員会の令和7年度の事務の管理及び執行の状況についての点検及び評価

- ・事務局から資料を用いて説明を行う。

《重点目標1について》

【委員】

- ・重点施策1－1（1）の実施内容の項目において「いじめの認知件数減少につながった」と記述されている。この「減少した」期間は、成果指標同様に2021（令和3）年から2025（令和7）年までの期間を対象として、いじめの件数が減少したという認識でよいか。

（1－1（1）いじめや問題行動の未然防止、早期発見・早期対応の徹底）

【事務局】

- ・記載内容は昨年度との比較を表している。5年間の推移については令和3年度が35件、4年度が71件、5年度が81件、6年度が69件、7年度が65件である。

【委員】

- ・先ほどの質問に関連して、成果指標の達成度が下がっている。数値の低下が、実際のいじめの発生件数とどのように相関しているのかという点について、分析し、その結果を記載するとよいのではないか。

（1－1（1）いじめや問題行動の未然防止、早期発見・早期対応の徹底）

【委員長】

- ・いじめの発生件数自体の増減だけで評価するのがなかなか難しい面がある。いじめの件数が少ないと、「しっかりと対応していないのではないか」「実際はいじめであるのに、いじめではないと見なしているのではないか」といった指摘をされることもあるため、件数だけで測るのは難しい。ただ一つの指標とはなる。

【事務局】

- ・ いじめの現状をどう捉えるか、あるいは、未然防止や早期発見・早期対応をどう捉えるかについては様々な観点がある。本市においては、市長をトップとする「いじめ防止専門委員会」を設け、これまで大きく3つの視点にこだわって取り組んできた。
- ・ 具体的には、1点目に「繰り返しいじめを行う子どもたちを減らすこと」、2点目に「加害者不明事案への対応」があり、これら2つはいじめの「防止」に関わる視点である。3点目は、今年の傾向として「子ども同士で謝罪行為ができない」という課題に対し、子ども同士は仲直りしたいと思っているものの、大人（保護者）がうまく解決に向かわせることができていない状況をどのように改善するかという、いじめの「解消」に向けた対応の視点である。
- ・ 事務局としては、以上の3つの点についてこだわりを持って取り組んできた結果としての認知件数であると認識している。委員長のご指摘通り、単に件数が少なければ良いという問題ではない。現状の（事務局の）捉え方として参考になれば幸いである。

【委員】

- ・ 重点施策1－1（7）に、「80時間未満の教職員の割合」という項目があるが、全体の時間としてどれくらい減ってきているのか、どのような傾向があるのかについて伺いたい。具体的な数字を出す必要はないが、全体として時間を減らせているのか、あるいは相対的に80時間以上の方の時間がどれくらい削減できているのか等、実施内容に加筆すると良い。

(1－1(7)教職員の働き方改革の推進)

【委員】

- ・ 成果指標の報告値については昨年度も意見したが、児童と生徒の数値が分かれているものと、児童と生徒の数値が一括りになっているものがある。先ほどの教職員の時間外勤務時間については一括りになっている。しかし、現実的に小中学校の状況が同じとはとても思えず、あえて一緒にしてあることで、一般市民や保護者の方がご覧になった際に「本当にこれでよいのだろうか」と単純に疑問を持たれるのではないか。例えば時間外勤務時間の状況等、小中学校の違いが分かるように内訳を示す等してはどうか。

(1－1(7)教職員の働き方改革の推進)

【事務局】

- ・ 時間外勤務時間については、毎月各学校から報告を受けている。委員ご指摘の通り、小学校と中学校では時間に差がある。昨年度は小学校が平均30.3時間、中学校が平均41.8時間である。

【委員長】

- ・ 羽島市教育委員会はかなり早い段階から中学校で部活動の地域移行を進めている。（これによって）中学校の先生方の負担感は多少軽減されているのではないかと。それでも、なかなか長時間労働を解消できていない。学校現場の感覚からすると、「もうこれ以上どこを絞ればいいのか」というほど、様々な業務縮小や効率化の政策が

講じられている状況である。このような中で、教育委員会として新たに考える「次の一手」や今後の具体的な方策について教えていただきたい。

【事務局】

- ・昨年度の実績で申し上げますと、月 80 時間を上回った教職員の割合は小学校で 0.5%、中学校で 3.4% である。さらに細かな内訳を見ると、管理職である教頭先生の年度初め及び年度末の時期に時間外勤務が増加している状況がある。なお、年間を通して月平均 80 時間を超えている教職員は 1 名のみである。
- ・教育委員会としては、各学校に対する様々な調査を削減する等、負担軽減に向けてできる限りの取組を進めていきたいと考えている。

【委員】

- ・学校施設のバリアフリー化に関する説明について 1 点確認したいことがある。報告値として 100% と記載がされており、その説明として「学校の校舎昇降口、玄関等の入口 1 カ所以上の段差解消した率」と記されている。これは、「すべての学校において少なくとも 1 カ所は段差解消等の対応を行った」という実績を指しているのか。

(1-3(1) これからの学校の在り方を踏まえた学校施設の長寿命化改修の推進)

【事務局】

- ・委員のご指摘通り、少なくとも 1 カ所は段差解消等の対応を行った実績を指している。

【委員】

- ・人権教育に関して、今回の数値は基準値と比較して非常に高くなっている。『自分によいところがある』という自己肯定感を持つ子どもたちが大きく増加している点について、非常に素晴らしいことだと感じる。こうした成果は、特定の政策を導入したことだけで急に上がるものではない。日々の学校現場において、先生方が子どもたち一人ひとりに真摯に向き合っている、その積み重ねによって子どもたちの肯定感が育まれているものと考えます。先生方のこれまでのご尽力に深く敬意を表す。
- ・日本人はどうしても自分の長所を肯定的に捉えにくい文化があるが、こうした変化が現れていることは本当に素晴らしい。

(1-1(3) 人権教育の推進)

【委員】

- ・先ほどの議題（いじめの認知件数）に関連して、文部科学省等においても、認知件数が多いことは「早期から疑いも含めて積極的に認知し、迅速に対応している」という観点から、むしろ肯定的に捉えている。もちろん、いじめ自体が 1 日も早くなるのが望ましいのは言うまでもない。学校現場では、「疑いも含めて、何か気になることがあればすぐに管理職へ報告すること」を徹底している。責任感の強い熱心な先生ほど、「自分で何とかしなければ」と抱え込んでしまい、問題が大きくなってから発覚するケースが見受けられる。そのため、「疑いのある段階で迷わず管理職へ報告してよい」という雰囲気をつくるのが、結果的に先生方の精神的な負担軽減にもつながるのではないかと。

(1-1(1) いじめや問題行動の未然防止、早期発見・早期対応の徹底)

- ・「きめ細かな支援の充実」について、先生方は一人ひとりきめ細かく対応している。大切な子どもを預かる立場として、学校間の引き継ぎがより円滑に行われるよう連携を深めていければと考えている。効果的なリレーションシップを築きながら、一人の子どもをしっかりと見守っていくような視点を大切にしていきたい。

(1-2(1)一人ひとりのニーズに応じたきめ細かな支援の充実)

【委員】

- ・重点施策1-2(1)の成果指標は、「個別支援計画に基づく支援が行われた件数」である。件数だけではなく、保護者の満足度等も併せて確認することで、違った視点からの評価が見えてくるのではないかな。もちろん簡単なことではなく、すべての施策を数字だけで読み取することは難しいが、量的データ(件数)に加えて、保護者の声や満足度といった質的な要素も取り入れることで、教育委員会の施策や重点的な取組が、より一層伝わりやすくなるのではないかなと感じる。

(1-2(1)一人ひとりのニーズに応じたきめ細かな支援の充実)

【事務局】

- ・例えば、重点施策2-1(1)の成果指標「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という項目を見ると、基準値から数値が非常に伸びており、目標値もクリアしているが、子どもを対象にした別のアンケートでは、地域との活動意欲は意外と低い結果であった。
- ・数字(成果指標)だけを見ていると「子どもがよく育っている」「地域との関わりが増えてきた」と捉えがちになるが、別の視点からの調査や評価を加えると、実感としての効果や評価はそこまで上がっていないことが分かることもある。委員からの貴重なご意見を今後の検討課題としたい。

《重点目標2・3について》

【委員】

- ・重点施策2-7(2)の成果指標に「保護者の満足度の割合」という記載があるが、この保護者は具体的にどのような対象から抽出されたものなのか。

(2-7(2)個々の発達支援を進める、関係機関との連携強化)

【事務局】

- ・幼児教育に関する項目であるため、対象は西部幼稚園の全保護者である。

【委員】

- ・誰が対象者なのか分かる表記にするとよいと感じる。

【委員】

- ・重点施策2-2(1)の成果指標では「8割達成した児童生徒の割合」という形で、割合の割合として達成度が記載されている。こうした形の達成度評価を表示する際には、補足として、例えば「完全に10割を達成している生徒がどの程度いるのか」や、逆に「5割以下に留まっている生徒がこれくらいいる」といった詳しい内訳や分布を示すことで、データ全体の解像度が上がってより分かりやすくなるのではないかな

いか。

(2-2(1)1人1台タブレット端末を活かした個別学習や協働学習の実現)

- ・キャリア教育の成果指標は、「将来の夢を持っているか」という設問に対する肯定的回答をした児童生徒の割合となっている。大人世代でも先の見通しが難しい時代である。児童生徒に話す際は夢を一つに絞る必要がないことや、抽象的でもよいということを伝えるとよいのではないか。これまでは「具体的にどういう職に就きたいか」という点が話題になりがちだったが、例えば「車関係の仕事が良い」、「人と触れ合えるような仕事が良い」といった、少し広くくりや方向性であっても、アンケート等で肯定的回答として扱えるような、回答の引き出し方や設問の工夫をしていただけると良いのではないか。

(2-8(3)地域と連携したキャリア教育の推進)

- ・体力テストに関する成果指標として、「チャレンジスポーツ in ぎふ」の取組に参加した学校の割合となっているが、最近、PTAの会議等で体力テストの結果を聞くと、数値が低下している傾向が見受けられる。近年は猛暑の影響で夏場に外で遊ぶことが難しく、家庭に帰ってからもゲームやYouTubeの利用時間が増加する等、日常的な外遊びの機会が減っていることが、体力低下の一因として関係しているのではないかと懸念している。この重点目標の達成状況と、実際の体力テストの結果がどのように結びついているのか、その相関関係データ等があれば、今後の実施内容等の項目において補足していただけるとよい。

(2-5(1)体力テストの結果に基づいた体力向上の取組)

【事務局】

- ・子どもたちの体力低下については、教育における大変重要な課題として捉えている。「チャレンジスポーツ in ぎふ」の取組を積極的に推進するとともに、昨年度からは新たに体力向上推進事業等も実施している。普段の体育の授業においても、専門家からの指導・助言をいただき、体力向上にさらなる充実に努めている。しかし、暑さにより屋外活動が制限されたり、プールや水泳の授業についても気温が高すぎて開催できない日があったり、近年の厳しい気象状況の中において、子どもたちに対してどのように効果的な指導を行っていくかということが現在の課題である。
- ・今年度より実施している「第三次羽島市教育振興基本計画」では、委員ご指摘の体力に関する指標として、新たに「体力テストにおける総合評価C以上の子どもの割合」を設定した。目標値については、小・中学校ともにこれまでの約60%から小学校80%、中学校85%へと引き上げる設定としている。
- ・2つ目のキャリア教育の成果指標について、全国学力・学習状況調査の質問紙をそのまま引用して使用している。そのため、実際の調査運用にあたっては、補足説明を加えにくい側面がある。しかし、委員ご指摘のとおり、小学校や中学校の段階で将来の夢が明確に決まっていること自体、現実的には難しい面もある。この点については、事務局内で改めて検討したい。

【委員長】

- ・先ほど事務局からも説明があったが、今年度より「第三次羽島市教育振興基本計画」がすでにスタートしており、新たな取組を進めている状況である。来年度からは、この「第三次教育振興基本計画」に対する点検評価が始まることになる。計画における指標も大きく刷新されている。こうした状況も踏まえ、各評価委員の皆様から、

羽島市の教育に対する期待を一言ずついただきたい。

【委員】

- ・「朝食を毎日食べる子どもの割合」や「いじめはどんな理由があってもいけないと思う子どもの割合」については、100%でなければならない項目である。そこに対して、何パーセントかの子どもたちが達成できていない現状がある。その子どもたちをどう支援していくかについて、もちろん家庭の役割であるが、家庭、地域、学校、そして教育委員会が協力し合い、何らかの具体的な手立てを講じる必要がある。「誰が、何を、どうしていくのか」を明確にし、みんなで取り組んでいくことが求められる。
- ・指標の数値が「少し上がったから良い」、「下がったからダメ」ということではなく、「絶対にここは外せない」という部分に対して手立てを打っていくことが重要である。やるべきことが多く、全てを網羅することは難しいからこそ、重点的な項目を絞って実行していくことが、羽島市の特色や強みにつながっていくのではないかと。最後に、日頃から熱心に取り組んでいただいていることに感謝する。

【委員】

- ・計画も結果の報告も非常に網羅的で素晴らしい。第三次教育振興基本計画を見ても、これまでの取組の課題を一つずつ解決して前に進んでいることがよく分かり、非常に期待を持っている。
- ・先ほどは、重点項目3（家庭の教育力の向上）について意見しなかったが、家庭教育学級への参加率の数値が低いと感じている。この課題は教育委員会や学校の中だけでは解決が難しく、当然 PTA や家庭の中でも数字を増やしていくための協力体制をきちんと築く必要があると改めて認識した。これに関連して、最近懸念しているのが、家に帰ってからや、学校の休日に起きたネット上のトラブルを引きずったまま、学校の中で問題になるケースが非常に増えているという点である。本来は家庭の中で解決すべき部分まで学校が負担していると感じることもある。そういった側面も含めて、家庭や保護者も子どもと一緒に成長していく必要があると感じている。

【委員】

- ・第三次振興基本計画の中で最初に印象を持ったのは、教育理念が「次代の羽島」という言葉から、「未来の羽島」へと変わっていることである。未来を見据えて、教育委員会の皆様をはじめ、各先生方の夢や思いが非常に伝わってきて、大変素晴らしいと感じる。
- ・点検評価のまとめ方も非常に焦点化されており、自信を持って進められていることが伝わってくる。
- ・数値目標はもちろん大切だが、上がった下がったで一喜一憂するのではなく、「未来の羽島」の実現に向けて、子どもたちが望む姿に向かって尽力していただければ大変ありがたい。

【委員長】

- ・教育活動に誠実に取り組まれている姿勢が報告書から伝わり、第三次の内容も今後の展望を見据えた素晴らしいものになっている。
- ・施策指標は網羅的に示す必要があるが、実効性を高めるためには「一点突破」の発想が重要である。表面的な数字だけでなく、「ここに力を入れる」という重点ポイント

トを定め、そこを伸ばすことで全体を引っ張っていく工夫を期待する。

- ・ 予測困難な現代において、5年前の基準や計画をそのまま固定化せず、状況に応じて項目を変更することで、より実効性のある成果指標となる。また、途中で達成した項目を外して新しいものを入れたりする柔軟性を持つてほしい。
- ・ 目標値の設定は大変難しい。「頑張れば6～7割達成できる可能性がある」と思える難易度設定にすることが最もやる気を引き出すと言われている。今後も必要に応じて目標値の見直しを考えていただきたい。

6 その他

7 閉会